

# Cusanus の visio Dei の問題

塩 路 憲 一

## 1. 本論の目的

本論の目的は、Cusanus に於ける神の理性認識と visio Dei との関係を明らかにすることである。その際、*Idiota de mente* (1450) と *De visione Dei* (1453) を考察の中心とする。

Cusanus はしばしば神秘主義との関連において論じられて来た。<sup>(1)</sup> 事実、Cusanus の 1445 年までの著作には、彼の *docta ignorantia* の立場を、神秘主義の中に位置づけるとする Cusanus 自身の思索の方向が見てとれる。<sup>(2)</sup> しかし、*Idiota de mente*、次に続く *De visione Dei* では、むしろ、神秘主義との距離の方がより明確になって来ているように思われる。本論の目的は、Cusanus 独自の *docta ignorantia* の世界を、*intellectus* と visio Dei との関係を見定めることにより、確かめることにある。

## 2. 予備的考察

Kremer は或る論文に於いて、<sup>(3)</sup> Cusanus の理性認識を取り扱っている。その際、*Schau Gottes* を Cusanus の理性認識に認める Velthoven の解釈を批判している。<sup>(4)</sup> Kremer の主張は次のとおりである。1) Velthoven が Cusanus の *Schau Gottes* として挙げた *Idiota de mente* の *intuitio veritatis absolutae* は *Schau Gottes* を意味していない、ここでの *veritas* とは「多」の原理である *mens humana* の *simplicitas*、即ち *unitas absoluta* の似像のことである。2) *Idiota de mente* で Cusanus は、人間精神の知解力の最高段階を *intellectibilitas* と表現しているが、*intellectibilitas* は概念形成による神認識で、*intuitio* や *visio* といった直接把握とは異なっている。3) *intellectibilitas* は本来、人間精神の自己認識の能力である。<sup>(5)</sup>

この Kremer 解釈では intellectus の限界が mens humana の simplicitas である。しかし、Cusanus が *De docta ignorantia* につけた手紙で ut incomprehensibilia incomprehensibiliter amplecterer in docta ignorantia とのべているような、いわば神認識の肯定的側面は、いかに解釈されるべきであろうか。Kremer は、人間精神は irgendwie 神の visio に達するのだとも<sup>(7)</sup>のべているが、irgendwie とは、どのような wie であろうか。

### 3. intellectibilitas について

Cusanus は mens humana を *Idiota de mente* に於いて、'vis' によって4つに区分している。vis animativa, vis ratiocinativa, vis intellectualis, vis intellectibilis (あるいは intellectibilitas) がそれである。<sup>(8)</sup>

しかし、上の箇所では intellectibilitas についての説明はない。もう一箇所 Cusanus は intellectibilitas なる表現を *Idiota de mente* で用いている。そこでは次のようにのべられている：Nam Plato ad creatoris imaginem respiciens, quae maxime est in intellectibilitate, ubi se mens simplicitati divinae conformat,……<sup>(9)</sup> この記述から Cusanus が intuitio veritatis absolutae について述べている次の箇所が intellectibilitas の説明にあたるものと思われる：Utitur autem hoc altissimo modo mens se ipsa, ut ipsa est Dei imago. Et Deus, qui est omnia, in ea relucet, scilicet quando ut viva imago Dei ad exemplar suum se omni conatu assimilando convertit. Et hoc modo intuetur omnia unum et se illius unius assimilationem, per quam<sup>(10)</sup> notiones facit de uno, quod omnia……。

これら二箇所の記述から intellectibilitas は次のように解せられる。1) intellectibilitas とは imago Dei が最も明らかになる場所である、しかも imago Dei とは人間精神自身である。2) 人間精神が自己の原型である神へと向き直り、神の simplicitas を se assimilare あるいは se conformare する場所である。3) se assimilare によって、unum についての概念を形成する。

以上 Cusanus の intellectibilitas の説明から明らかなことは、unio mystica を終極とする神秘主義との差異である。intellectibilitas なる表現は12世紀の神秘主義の伝統に根を置く表現で、<sup>(11)</sup> Thierry von Chartre と Cusanus の *De docta ignorantia* との間

の密接な関係を指摘する研究もあることから、Cusanus の *intellectibilitas* が上の伝統を継承しているのではないとも考えられるが、実際には、Cusanus の *intellectibilitas* についての上に挙げた説明の中に、理性の自己否定や合一といった神秘主義的要素を読み込むことは不可能である。se assimilare や se conformare を unio と解することはできないのである。

しかしながら、同時に、Cusanus が概念形成についてのべていることから、*intellectibilitas* を、概念を媒介とした、論理的推論による神認識と見なすこともできない。Cusanus にとって Syllogismus は ratio の世界に属する。<sup>(12)</sup> また ratio によって形成される genus や species といった概念と、事物の究極の forma を映す言葉とは、はっきり区別されている。<sup>(13)</sup> ここから *intellectibilitas* に於いて形成される概念が Cusanus にとってどのようなものか、明らかである。Cusanus にとっては forma は事物に内在するのではなく、究極的に unitas absoluta が forma rerum である。この infinita forma を直接映す言葉が、*intellectibilitas* でいうところの *notiones* でなければならない。*Complementum theologicum* (1453) によれば、人間精神は veritas そのものの quid-est には到達しないが、veritas の quia-est の認識から、人間精神の内に働く veritas を鏡として、この鏡を通して、veritas の quid-est に近づいて行く、これが *speculatio* であるということである。<sup>(14)</sup> *intellectibilitas* で得られる *notiones* とは、この真理の鏡に映された真理の像でなくてはならない。ここから、*intellectibilitas* では、何か intuitio または visio と呼ばれるべき、unitas absoluta との直接的接触が理性におこり、この接触を通じて、真理そのものを映す像たる *notiones* が形成されてくると解されるべきであると考えられる。

*intellectibilitas* の認識対象が imago Dei たる mens humana の simplicitas に限定されるという解釈も、前述の Cusanus の *intellectibilitas* の説明から引き出すことはできない。それは *Idiota de mente* の他の箇所からも明らかである。Cusanus は或る箇所では vis disciplina と vis intelligibilis と呼ぶ二つの認識についてのべている。<sup>(15)</sup> それによれば vis disciplina とは、人間精神が formae rerum extra materiam を認識する能力であるのに対して、vis intelligibilis とは全てを absque compositione in simplicitate に直接把握する能力である。この際、前者では人間精神は自己の immutabilitas を認識し、後者では自己の simplicitas を認識していることが不可欠である。

事物の真理を認識するにあたって、人間精神が自己の *simplicitas* を認識するのが *vis intelligibilis* と呼ばれる能力であるが *intellectibilitas* は明らかに、この能力より一段階上にある。*intellectibilitas* は、人間精神の *simplicitas* が *unitas absoluta* の似像であることを認識しているのである。すなわち後者では、人間精神の *simplicitas* の存在論的根源が開示されているのである。人間精神が *simplicitas* であるための存在論的根拠たる *unitas absoluta* の何らかの開示の光の中で、神の似像たる人間精神は、自己の似像性を認識しているわけである。ここでは、力点はむしろ *imago* にあるのではなく、*Dei* つまり、原型たる神の方にある。神の照明と表現されているのは *intellectibilitas* に於いて、人間精神が、自己の存在の根源の発する光に出会っている、ということを書き表わさんがためであろう。

Koch は Cusanus の哲学を「上からの形而上学」と呼んでいるが、<sup>(16)</sup> *mens humana* の考察を *mens divina* の似像であるということから始める *Idiota de mente* も、「上からの形而上学」と言える。「上からの形而上学」にあっては、存在論的にも、認識論的にも、一段階下のものは、上位のものの方がなければ成立し得ない。存在論的には、*unitas absoluta* は *intelligentia* の、*intelligentia* は *ratio* の根拠であり、認識論的には、*intelligentia* の光が *ratio* の認識を可能ならしめる。<sup>(17)</sup> それ故、人間精神が、*formae rerum extra materiam* を認識するためには、上に示した如く、自己の *immutabilitas* の認識が、全てを *simplicitas* に於いて認識するためには、自己の *simplicitas* の認識が必要であった。だから、今、人間精神が自己の *simplicitas* を認識するためには、自己が神の *imago* であるという認識が不可欠であり、*imago Dei* 認識のためには、何らかの方法で、*imago* の原型である神を認識しなければならない。*intellectibilitas* はこの神認識に達する *visio* あるいは *intuitio* なのである。

また、「上からの形而上学」という観点から、Kremer の主張〔*intellectibilitas* は「多」の原理である *mens humana* の *simplicitas* 認識にとどまり、ここで認識される *unum* は *mens humana* の *simplicitas* を指している〕は正しくない。何故なら、Cusanus にあって、*unum, quod omnia* といわれるものが、*unitas absoluta* 以外ではあり得ないし、*veritas absoluta* が、*unitas absoluta* ではなく、その似像にすぎない *mens humana* の *simplicitas* であることはできないからである。究極的には全てが *unitas absoluta* の *Theophanie* であるとする Cusanus にあって、どうして似像を

unum, quod omnia また veritas absoluta と呼ぶことがあり得ようか。この点からしても、Cusanus が intuitio veritatis absolutae とする intellectibilitas の対象は unitas absoluta であり、intellectibilitas は visio Dei なのでなければならない。ではこの visio Dei は、どのような性質のものか。

#### 4. visio Dei について

Cusanus は unitas absoluta をとらえるにあたり、人間精神の知解力の限界を coincidentia oppositorum と呼ぶ。<sup>(18)</sup> *De visione Dei* の表現に従えば、神は coincidentia oppositorum の壁の中に住む、あるいは coincidentia oppositorum の壁の向う側で神は見出されるのである。<sup>(19)</sup> 人間精神は、神が何であるかを求めて、coincidentia oppositorum のところで「闇」<sup>(20)</sup>に出会うのである。Cusanus は神秘主義の伝統どおり、理性の闇を経て、人間精神は visio Dei たる raptus mentalis に到ると述べているわけである。しかしながら、ここは、最も顕著に、Cusanus と神秘主義との相違があらわれているところでもある。確かに「闇」から raptus へという神秘主義の一つの定型が、ここで踏襲されているが、Cusanus にあっては、この過程が、infinitas absoluta を videre することを通して、<sup>(21)</sup>つまり何らかの理性的認識によって可能となっている。だから Cusanus にあっては、「闇」が、神秘主義にとって重要な意味をもつところの「理性の死」、神の霊の流入、transformatio といったものと結びついていない。むしろこのようなモチーフが全く欠落している。さらに、unio に関して、Cusanus は filiatio Dei という概念を用いて説明するが、filiatio Dei とは attractio naturae humanae ad divinam in altissimo gradu <sup>(22)</sup>である。filiatio Dei の原型はイエスであって、人間の場合（似像ではない人間の場合）、unio は神に限りなく近づくとということである。このような unio 論は、神秘主義の unio mystica、transformatio とは異なり、神と人間との存在論的差異を、filiatio の原型イエスとその似像たる人間との対比によって説明しているにとどまる。

さて、Cusanus は人間精神による visio Dei を *De visione Dei* では、「上からの形而上学」にふさわしく、神の visio から説明する。神の visio とは、神から被造物への関係を表わす。それ故、visio Dei とは providentia, gratia, <sup>(23)</sup>愛、<sup>(24)</sup>神の働きである。次に人間の神に対する関係が、神の videre から、この visio Dei（ここでは genitivus

subjectivus) の似像としての visio Dei (ここでは genetivus objectivus)<sup>(25)</sup>として説明される。人間精神の Deum videre とは Deum amare<sup>(26)</sup>である。神への愛が常に人間をして神へと向わしめる。この visio はまた、人間精神の理性的働きとして見られるときは、intelligere, intellectus, intuitus, concipere, conceptus<sup>(27)</sup>である。つまり、Cusanus が visio Dei についてのべるとき、visio Dei は raptus mentalis たる visio Dei に限定されてはいない。人間が神の imago だという大前提から、神の被造物への関係を visio ととらえ、人間精神の神への関係を、神の visio の imago たる visio Dei と捉えるのである。先に filiatio についてのべたことが、visio Dei についても同様にあてはまる。即ち、ここで説明されているのは、人間精神の被造性、似像性の限界と、人間精神の、神へ向う存在論的構造についてである。

このように人間の存在論的構造が神の visio の imago としてとらえられたとき、人間の「愛」と「理性」は、二つの異なった対象領域に働く、全く違った働きではなく、神の visio が「愛」ととらえられたとき、その似像たる人間精神の働きも「愛」と理解されるのであり、神が intellectus intelligens ととらえられたとき、人間は intellectus creatus、また神が mens divina であるとき、人間は mens humana、その intellectus の働きは、神にあっては concipere が創造であり、人間にあっては concipere は visio intellectualis と se assimilare<sup>(28)</sup>だと捉えられる。故に人間精神の「愛」の完成、即ち、神へ向う存在論的構造の実現は、intellectus の完成でもあり、intellectus が憩を得る終極でもあるのである。<sup>(29)</sup>intellectus creatus は、似像の限界として、coincidentia oppositorum という壁に出会う。しかし、神へ向う存在者、Deum videre を遂行する存在者としての人間は、この闇にとどまっていなくて、更に filiatio Dei としての自己完成に向う。このとき、intellectus ととらえられた人間精神は、coincidentia oppositorum の境界を越して、raptus mentalis たる visio Dei に到達するのである。

以上から明らかな如く、raptus mentalis は、人間の神への関係の完成点であって、この完成を目指して人間精神が、intellectus として、神そのものをより明瞭に (clarius) とらえんと営みを開始するのは、coincidentia oppositorum の壁のところからである。coincidentia oppositorum 点で、神は、人間精神に、absoluta infinitas, in infinitum super omnia talia absolute superexaltatus<sup>(30)</sup>として立ち現われてくる。先にのべた intellectibilitas に於ける notiones とは、この absoluta infinitas を映す言葉なので

ある。本来言葉では言い尽せない inattingibilis veritatis unitas<sup>(31)</sup> を、それ自身ではなく、alteritas で（似像あるいは aenigma で）人間精神の中に映して行く。これが notiones であって、このような notiones は、absoluta infinitas の論証手段ではない。自らを開示する absoluta infinitas を人間精神が映し、そのことによって形成されてくる、真理の似像である。人間精神がこの absoluta infinitas を、この絶対者の光によって照されて自らに映すのが、intellectus の visio である。この visio は、raptus mentalis としての visio Dei ではない。

晩年の著 *De apice theoriae* (1463) では、Cusanus は、明らかに *De visione Dei* に言及して、「闇」を経て intellectus は神認識にいたるとした点を訂正し、「光の中で」と言い替えている。ここに到って Cusanus は彼の visio を全く神秘主義の枠外で考えているのである。光によって達せられる visio を、Cusanus はここで、simplex visio mentalis<sup>(32)</sup> と表現している。*De apice theoriae* にあって、unitas absoluta は posse ipsum と呼ばれている。人間精神は自己自身を認識する (videre) ことにより、全ての存在物の根拠が自分にあるのではなく、自分を越えた posse ipsum のところにあり、自分自身もまた、posse ipsum の modus apparitionis であることを videre する。simplex visio mentalis は、神を uti est にではなく、varius にあるいは maius に videre<sup>(33)</sup> する。Paulus の raptus に比較される visio Dei は visio essentiae Dei であるが、simplex visio mentalis は、神について quaestio をさしはさむ者の存在も疑うという行為自身も、却って posse ipsum が全てに先んじて、praesupponere していることによって始めて、可能になっているのであるという、全ての存在の根源についての明瞭な認識である。<sup>(34)</sup> この simplex visio mentalisこそ、先にのべた intellectibilitas の visio と一致する。<sup>(35)</sup>

## 5. 結 論

以上から次のことが明らかである。1) Cusanus の intellectibilitas とは、神秘主義の visio Dei あるいは raptus mentalis とは異った、visio intellectualis である。それは晩年の著で simplex visio mentalis といひ表わされているものである。Cusanus が「闇」から raptus mentalis に向う過程で、absoluta infinitas を videre するとのべているが、まさしく、この videre が intellectibilitas の内容である。2) intellectibi-

litas は決して人間精神の自己認識にとどまらず, absoluta infinitas の、「より」明瞭な認識である。これが、神の似像たる人間精神の、似像性から由来する限界である。De apice theoriae という標題が示す如く, Cusanus は、晩年、似像たる人間精神の到達点を, unio mystica に終わる神秘主義の apex mentis に対して, apex theoriae と呼んでいるのである。3) しかし、このことによって、Cusanus は、人間精神の理性的働きを、例えば「信仰」と「理性」、「愛」と「理性」という風に限定してとらえているのではなく、神へ向う人間存在の、神へ向っての人間精神全体としての営みと捉えているのである。

Cusanus の独自性は、神秘主義に対しては、似像性の限界を示しているところに、また、「理性」や「信仰」を区分してしまう考え方に対して、人間精神全体の、「一」なる営みを visio として示しているところにある。De visione Dei や Idiota de mente は、晩年の著 De apice theoriae においてはっきり表現を得ている、Cusanus の思索の独自性に、Cusanus 自身が明確な表現を与えようと自覚的に試みている著作である。

## 註

- (1) 例として、Josef Bernhart, *Die philosophische Mystik des Mittelalters*. Darmstadt, 1974, S. 212 f. を挙げておく。また、シャルトル学派との関連は、Nikolaus von Kues. *Die belehrte Unwissenheit*. Buch I, hrsg. Paul Wilpert, Hamburg, 1970, S. 117. 以下の注に詳しく論じられている。エックハルトとの関連については、Josef Koch, “Nikolaus von Kues und Meister Eckhart”, *Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft*, 4 (1964), 164-173 に詳しく論じられている。
- (2) Ernst Hoffmann, “Die Reformation der Philosophie am Ausgang des Mittelalters” In: Karl Vorländer. *Philosophie des Mittelalters*, Hamburg, 1964, S. 147. Heinz-Mohr et al. (Hrsg.), *Das Werk des Nikolaus Cusanus. Eine bibliophile Einführung*. Köln, 1963, S. 28f. 参照。編者は *De Deo abscondito*, *De quaerendo Deum*, *De filiacione Dei* の三著作に “Kernstücke der deutschen Mystik” を見出している。
- (3) Klaus Kremer, “Erkennen bei Nikolaus von Kues. Apriorismus-Assimilation-Abstraktion” *Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft*. 13 (1978), 23-57.
- (4) Theo van Velthoven, *Gottesschau und menschliche Kreativität. Studien zur*



*Erkenntnislehre des Nikolaus von Kues*. Leiden, 1977, S. 122 f. 参照。

- (5) Kremer. “Erkennen bei Nikolaus von Kues...” 49 f. 参照。
- (6) Nikolaus von Kues. *Philosophisch-Theologische Schriften*. hrsg. von Leo Gabriel, Wien, 1966, 1. Bd., S. 516. (以下 Cusanus の引用は全て *Philosophisch-Theologische Schriften* からおこない、*PTh.* と略記する)
- (7) Kremer, “Erkennen bei Nikolaus von Kues...”, 50.
- (8) *PTh.* 3. Bd., S. 512.
- (9) *PTh.* 3. Bd., S. 596.
- (10) *PTh.* 3. Bd., S. 542.
- (11) Marie-Dominique Chenu, “Die Platonismus des zwölften Jahrhunderts” In: *Platonismus in der Philosophie des Mittelalters*. hrsg. von Werner Beierwaltes, Darmstadt, 1969, 294; Endre von Ivánka, “Der Apex mentis” In: *Platonismus in der Philosophie des Mittelalters*, S. 143.
- (12) *PTh.* 3. Bd., S. 516.
- (13) *PTh.* 3. Bd., S. 494; *Ibid.*, S. 498.
- (14) *PTh.* 3. Bd., S. 654; *PTh.* 2. Bd., S. 624.
- (15) *PTh.* 3. Bd., S. 548.
- (16) Josef Koch, “Der Sinn des zweiten Hauptwerkes des Nikolaus von Kues *De conjecturis*” In: Josef Koch. *Kleine Schriften*. 1. Bd., Rom, 1973, S. 605.
- (17) Josef Stallmach, “Vernunft als » Sinn für Gott « Zur Frage natürlicher Gotteserkenntnis im Anschluß an Nikolaus von Kues” In: *Um Möglichkeit oder Unmöglichkeit natürlicher Gotteserkenntnis heute*. hrsg. von Klaus Kremer, Leiden, 1985, S. 77. 参照。
- (18) *PTh.* 3. Bd., S. 132.
- (19) *PTh.* 3. Bd., S. 142.
- (20) *PTh.* 3. Bd., S. 132.
- (21) *PTh.* 3. Bd., S. 144.
- (22) *PTh.* 3. Bd., S. 184.
- (23) *PTh.* 3. Bd., S. 102 f.
- (24) *PTh.* 3. Bd., S. 110.
- (25) Walter Schulz, *Der Gott der neuzeitlichen Metaphysik*. Pfullingen, 1978, S. 18.
- (26) *PTh.* 3. Bd., S. 104.
- (27) Werner Beierwaltes, “Visio absoluta” In: *Identität und Differenz*. Frankfurt/M., 1980, S. 146 参照。

- (28) *PTh.* 3. Bd., S. 534 参照。
- (29) *PTh.* 3. Bd., S. 216.
- (30) *PTh.* 3. Bd., S. 144.
- (31) *PTh.* 2. Bd., S. 4.
- (32) *PTh.* 2. Bd., S. 366.
- (33) *PTh.* 2. Bd., S. 372.
- (34) *PTh.* 2. Bd., S. 370.
- (35) *PTh.* 2. Bd., S. 374